

万葉の歌、北野丘陵物語

北野寿囲碁同好会 刀根 正樹

万葉集に、北野の丘陵を歌った句がある、と聞いた。『多摩の横山』と呼び万葉の人々は、この丘陵を愛で生活の中で取り込んでいた。自然が豊かで昔も今も人々に恵みを与えている。私がこの地を終の住家を選んだのは、職場に近く空気が清浄だけでなく、心の琴線に触れる情景、香りを感じたからである。懐かしい呼び声を聞いたと思った。あれから40年碁楽連の鎌倉七段を始め、若林、横藤田氏等もここで囲碁三昧の日々を送る。野猿峠は、別称猿丸峠と呼び、古来眺望の勝地である。江戸時代の書物に『山上すべて松樹立てり』とある。

峠の展望台から眺める多摩の山並みの迫力はどうか。霧降の道を北に下ると右手の斜面に防空壕跡がある。太平洋戦争の悲しみと涙がしみこんでいる。麓には荘厳な六社宮があり、鎮魂の趣がただよう。絹の道は、鑑水地区から北に登り丘陵を越える。峠に道了堂があり心霊スポットである。ある夏の日、私は石段



野猿峠

に腰を下ろし、夕焼を眺めていた。ふと影が差し品の良い面長の老女が現れた。『この寺に、おばあさんが一人堂守をしていましたが、強盗に殺されたのです』石段の上に廃屋が見えた。そして老女は突然消えた。

絹の道のどこにもいなかった。曹洞宗永泉寺別院。八王子市が解体し、公園にした。その後老婆の幽霊が出るという噂が立った。女子高校生が見たという。白山神社には、百段を越す古い石段がある。中山村の氏神であった。団地が付近に出来、老人の参拝が増え巣鴨に似た風景になった。新保、平田、古賀氏を始め多くの碁楽連会員が暮らしている。神社の取り持つ縁というべきか。ここから富士山が眺められ桜の名所である。北野天神は、八王子の豪族榎山党が京都の北野天満宮をこの地に勧請したという。北野という地名もそれに由来する。境内や付近の小学校から縄文時代の遺跡が発見され、市の指定文化財になった。時は遥かに流れ、樹齢四百年を超える御神木のまわりで河津、高野氏は遊ながら育った。また、すぐ近くにある食品工場では、女子寮に出没する夜這いを、独身青年の私がホウキを持ち、追い回していた。

北野駅前に、市民センターがある。碁楽連北野支部は、ここで20年活動を続けている。近くのマンションに笠原、山本林氏が住む。市民センターの中に、八王子図書館の分室がある。私は、万葉集の全集を調べた。膨大な内容である。万葉の歌人達の魂に圧倒されながら、頁をめくり続けた。『多摩の横山』の句は、なかなか現れなかった。第21巻、万葉集の最終章にそれはひかえめに記されてあった。その句は、私の胸に衝撃を与えた。『赤駒を 山野には かし 捕りかにて 多摩の横山 徒歩(カシ)ゆかやらす』黒女(クロメ)解説によれば、作者はクラシベノアラムシ(荒虫)の妻、ウジベノクロメ(黒女)であるという。『赤駒を山野に放牧していて、捕えかね、多摩の横山を歩いて行かせることか』という内容である。赤駒とは、夫への燃える愛情を黒女が表現したのではないか。夫への熱き慕情は、赤い馬と化して丘陵を走る。その呼び声を、私はかねて聞いたようであった。北野丘陵で、私はそれをずっと聞きながら暮らしていたと思った。

図書館から、囲碁の会場に私は移動した。盤上の黒石が私に語りかけるようであった。そこに黒女がほほえんでいた。私は万葉の心に溶け込むのを覚え、嬉しかった。

(碁楽連だより 第206号 2008年9月27日)